

「すぐに引き渡せって、言わなかった？」

確認するように告げる声は酷く冷徹で、部屋の温度が急降下するような錯覚を覚える。

男達は身震いしながら怯えるが、ようやく言い訳がましく捲し立てた。

「連れて行こうとしたんだ！だが、あんまり暴れるもんだから・・・」

そのまま、二の句が続けられず、愛想笑いに切り替える男に、イギリスもそれ以上の追及はしなかった。

「そうか・・・」

誰もが肯定的に捉えたと思えた時、緩やかに腕を解放したイギリスは、再び大きく足を振り上げていた。

そして、軽やかに身を捻って、目の前の男を空中へ蹴り飛ばしていく。

自分のよりも体格が二回以上小さい者に、蹴りつけられても、普通なら簡単に受け止められる。

それなのに、体術の心得のあるイギリスのキックは、殺傷能力が高く、軽やかに見えて強烈な一撃だった。

問答無用で宙を舞った男は、近くの壁に叩きつけられ、新たな風穴を作って目を回している。

残されたもう1人は、小さな悲鳴を上げると、一目散に倉庫から飛び出していった。

他愛無いと言いたげに嘆息を吐いたイギリスは、改めてスペインに向き直っていく。

「迎えに来てやったぞ」

醒めた顔で高慢に告げるイギリスに、苛立ちが募るばかりのスペインは、太々しい態度のまま吐き出した。

「呼んでへんわ」

どれほど悪態を吐こうとも、捉えられた身の上では、威力も半減だった。

それでも、威嚇するように睨みつけてくる瞳は、自尊心に溢れており、イギリスも思わず笑みが零れる。

「・・・いいザマだな」

薄く笑って見下ろしてくる瞳は、愉悦に満ち溢れていた。明らかに蔑んでいる所作に、更に苛立ちを募らせたスペインは、怒気を強めた。

「誰のせいや、ホンマ腹立つジャリガキやなあ！」

「ステキな挨拶だな」

軽く笑い声を上げるイギリスに、ますます怒りが浸透する。

「ぬかせっ！」

捕まえたところで、覇者の風格が陰りもしないスペインに、畏怖や従順など微塵も感じられない。

それを喉元で笑ったイギリスは、そのまま声を高らかにしていき。

半ば狂ったような高笑いを、怪訝そうに見定めていたスペインは、場が静まり返るのを肌で感じとった。

しかし、それさえも煙たそうに顔を歪ませて様子を窺うと、イギリスの意味ありげな笑みで微笑まれる。

それでこそ、手に入れるに相応しいと思ひ耽るイギリスは、不意に扉の外を一瞥した。

いつの間にか増えていたやじ馬達の騒々しい声に、強く舌打ちすると、嘆息混じりに呟いた。

「ここは風通しが良すぎるな」

煩わしそうに呟くイギリスに、軽く笑ったスペインは、嘲りが混じっていた。

「お前が壊したんやろ」

不遜な態度を貫くイギリスは、当然の制裁だと言いたげに、周囲中を蔑んでいく。

「俺の前を塞ぐバカがいたからな」

忌々しいと吐き捨てる声に、スペインの顔が陰しくなったが、徐に踵を返したイギリスは、破壊した扉から身乗り出した。

「おい、誰か、コイツを本船まで運べ」

集まっていたやじ馬の一部が、慌てて直立不動で敬礼すると、口々に了解の合図を告げる。

一方的に命令だけして、その場を後にするイギリスに、苦々しいため息を吐き出したスペインに、再び船員達が駆け込んでくるのを、曖昧に眺めていた。

再び担がれそうになり、足で薙ぎ払うスペインに、先程のイギリスの蹴りを連想した船員達が、小さな悲鳴と共に僅かに後退さる。

「自分で歩ける！」

縛られたままの両手を握りしめながら、高圧的に吠えるスペインに、今度の船員達は力なく数度だけ頷いた。

道案内されるがまま本船へ乗り継いだスペインは、必要以

上に豪華な船に辟易した。

どれほど威厳を積んだ船でも、沈む時は一瞬だからこそ、滑稽に思えてならない。

それとも、沈没の可能性など微塵もないのかと思いと、先程のイギリスの高慢さにも納得出来る。

広い甲板をぐるりと後方へ回り込み、いくつかの通路と扉を潜り抜けると、一段と広い部屋に辿り着いた。

そして、更に呆気にとられることになった。

とても船の中とは思えないほど豪華な眺めは、まるで私室をそのまま嵌め込んだような空間だった。

足元は肌触りの良い絨毯が敷かれており、机やダンスにベッド、食器棚まで、必要最低限の家具が揃っている。

甲板を通過してこなければ、船内と云うことを忘れそうだが、船のサイズ差もあっても、自分が使っている部屋は、簡素で機能的な分、この部屋は無駄な空間が多すぎる。

同じ船長室でもこうも違うのかと思えば、笑いが込み上げてくる。

嵐に巻き込まれたら、掃除だけでも大変そうだと考えるのは、様々な海を見てきたからだだった。

入室制限がされているのか、案内役はスペインだけを残して、すぐに部屋から出て行ってしまった。

一人で取り残され、手持無沙汰になる中、改めて部屋を見渡した時、少しだけ違和感を覚えた。

しかし、その原因に思い当たる前に、背後の扉が開かれた。肩越しに視線を向ければ、軍服から軽装に変わったイギリス

スが視界に入る。

暗い寝室からランプで明るい部屋に移動したせいか、淀んだ眼差しが、やけに引っ掛かりを覚える。

眉根を寄せるスペインと同じく、イギリスの方もしかめっ面に変わっていく。

「お前、汚ったねーなぁ・・・」

思ったことをそのまま口に出す様子に、頬を引き攣らせたスペインは、顔ごと目を逸らした。

小奇麗な部屋には不釣り合いだが、別に好きで来たわけでもないからこそ、素っ気なく答える。

「水不足やったしな」

嵐の被害が大きかったスペインは、飲み水を確保するのが精一杯で、風呂に入る余裕なんてあるわけがない。

緩慢なため息を零したイギリスは、無造作にスペインの首根っこを掴むと、そのまま力任せに引っ張った。

「こっちだ」

「なっ、なにすんねん！」

バランスを崩され、転ぶまいと足を出せば、そのまま横歩きで引きずられていく。

そして、出入口とは別の扉を開け放ったイギリスは、そこに投げ捨てるようにスペインを放り込んだ。

続き部屋があったことに驚いている合間に、手早くバブルを回したイギリスが、勢いよく水をぶっ掛ける。

「うわぁあ、なにっ！って、・・・ちよっ」

慌てふためくスペインは、服の上から浴びせられる水に身

を強張らせた。

しかし、常温程度の水は全く冷たくなく、自分から流れ落ちていく泥水に、少しだけ冷静になれる。

自分でも気付いてなかった小さな傷口が染み、水分を吸った服や縄が、徐々に重くなっていく。

どうせなら、まともに浴びたいと考えた矢先、壁に立てかけていたデッキブラシを手にしたイギリスが、横着にも擦りつけてくる。

「イツ、痛い痛いって！俺は船とちゃうねんぞ！」

完全に物扱いされている気分のスペインは、大声で反抗しながら、縛れたままの腕でデッキブラシを跳ね上げた。

そして、ブラシの先端に凭れるように両手を重ねたイギリスは、心底億劫そうに呟く。

「面倒なんだよ」

他人に頼むのも、自室を汚されるのも嫌だと言いたげな態度に、スペインが勢いよく両手を付き出した。

「ほな、自分で洗うから、これ外してーや」

それは、それで面倒だと舌打ちするイギリスだったが、効率を考えれば、スペインの意見の方が正しい。

そして、仕方なさげに腰に下げていたナイフを引き抜くと、両手を繋がっている部分を切り離した。

「終わったら呼べ」

颯爽と立ち去る背中を、スペインは怪訝そうに見送った。自分から言ったものの、これほど簡単に自由になるとは思っておらず、別の罠を危惧してしまふ。